

talk! talk! talk! 作家・C.W.ニコルさん



作家

C.W.ニコルさん

自然の美しさに惹かれ日本に移住したという作家・C.W.ニコルさん。作家として活躍を続ける一方で18年前から長野県で森の再生活動を行っている。世界各国で深刻な森林破壊の現場を目撃してきたニコルさんが日本で再生活動をはじめた理由とは、そして活動を通して伝えたいことは何か。

今回は執筆活動中に撮った写真と合わせて、自然を守りたいという熱い思いをたっぷり語っていただいた。

プロフィール

1940年、英国ウェールズ生まれ。17歳でカナダへ渡り、その後、カナダ水産調査局北極生物研究所の技官として、海洋哺乳類の調査研究にあたる。この間1962年、空手修行のため来日。1967年より2年間、エチオピア帝国政府野生動物保護省の猟区主任管理官に就任。シミエン山岳国立公園を創設し公園長を務める。1972年よりカナダ水産調査局淡水研究所の主任技官として、石油・化学薬品の流出事故などの処理にあたる。1975年、沖縄海洋博覧会・カナダ館の副館長として再来日。1978年からは取材のため和歌山県太地町に滞在。1980年長野県黒姫に居を定め、以後、作家・エッセイストとして執筆を続ける。1975年には日本国籍を取得。おもな著書に、『ティキシー』角川書店、『勇魚』文藝春秋社、『風を見た少年』講談社、『盟約』文藝春秋社、『裸のダルシン』小学館、他、多数。執筆活動の一方で自ら45,000坪の荒れた山林を購入し、過去18年にわたって生態系の復活を試みる森の再生活動に取り組んでいる。2001年、野生生物とともに人が豊かに暮らせる森づくりをめざしてNPO『アフアの森基金』を設立。2002年には財団法人C.W.ニコル・アフアの森財団を設立し、新たなスタートを切っている。

「日本の美しい自然で心を癒そうと思った」

現在は日本国籍を取得されていますが、もともとは英国、ウェールズのご出身そうですね。

ええ、でも祖国ウェールズは17歳の時に離れていますから、今ウェールズに戻っても浦島太郎みたいな状態でしょうね。

そもそも、日本に住もうと思ったきっかけは何だったのですか？

僕は17歳でウェールズを出てからカナダでクジラなど海洋哺乳類の調査をしていました。その後、エチオピア国立公園で野生動物や森を守っていたんですが、戦争が起きて公園が戦場になってしまったんです。僕は森のために一生懸命に戦いましたが、結局森の9割が破壊されてしまった。絶望しました。

エチオピアの戦いは本当に凄まじかったんです。その後、カナダ政府で仕事をしていたんですが、戦いを経験したことで僕はとてもどう猛になっていて、“このまま仕事をしていると危ない、自己が破壊されてしまう”と感じました。それで心の傷を癒すために日本に来ようと思ったんです。日本には以前空手修行で来たこともあり、美しい自然がたくさんあることを知っていました。日本の美しい自然の中を歩いて心の傷を癒して、それからまた仕事をしよう、日本で人生をやり直そうと思ったんです。そうして日本に来たのが38歳の時です。

長野県の黒姫という場所を選ばれたのもその頃ですか？

黒姫に住むきっかけは、詩人の谷川雁さん（※注）との出会いです。以前、空手修行で日本に勉強に来た時、雁さんと一緒に童話を書いたりしていたんです。僕は日本に来てから和歌山の太地という所で『勇魚』という、くじらと日本人を題材にした小説を書いていましたが、本ができるまで収入がないでしょ？ 雁さんは僕にお金がないことを分かっている、子供向けの古事記の翻訳の仕事と一緒にしないかと声をかけてくれたんです。その時すでに、雁さんは黒姫に住んでいたんで、1、2ヶ月に1回、黒姫に行くようになったんです。

太地に1年住んで、そのあと南氷洋に1年行った後、雁さんは僕に「それで君はこれからどうするの？」って聞きました。僕はその時、これからは作家としてがんばりたい、大好きな日本に住もうと思っていると伝えると、「じゃあ、黒姫に住みなさい」と言われ、僕も素直に「ああ、そうですね」と（笑）。それが1980年。40歳の時に黒姫に住むことを決意しました。

※注谷川雁＝詩人、評論家。1923年熊本県生まれ。1954年以降、詩集『天山』『大地の商人』『谷川雁詩集』を発表。1953年に黒姫に移住、以後評論家として評論集を刊行。1965年に上京、宮沢賢治の童話の世界をもとに児童文化活動にも取り組んだ。1995年、肺がんのため死去。



「think globally act locally」 地球規模で考え、身の回りから行動を起こす

ニコルさんは長年、黒姫で森の再生事業を行っていらっしゃいますよね。

そうですね、18年になります。黒姫の土地を少しずつ買い足して、手間ひまをかけてその土地に豊かな森を育む作業をしています。“アフアの森”と名付けたその森は、昨年、念願叶って財団法人になりました。

アフアの森を作り始めたいきさつを教えてくださいませんか？

僕が黒姫に来たとき、そこはどこよりも豊かで美しい自然に溢れていました。もちろん日本全体を見れば開発、開発で、貴重な原生林が各地でパッサパッサと伐られている事も知っていましたが、この黒姫の自然だけは大丈夫だと思っていました。ところが実際、それは間違っていたんです。黒姫のような山奥でさえ原生林が伐られてしまっていたんです。

僕はこれまでいるような場所で森を守ろうと戦ってきました。世界には僕と同じような考えを持った人も大勢いましたが、森を守りきることはできなかった。やっと辿り着いた黒姫でも森が破壊されていってしまうことに憂鬱になり、一時期は自暴自棄になってしまいました。

高度成長期頃の日本では、全国各地でダム建設が行われたりと森林破壊が進んだ時期でもありましたね。

本当に憂鬱になりましたよ。言論の自由があって宗教の自由があって、国民のほとんどが字を読み書きできて、平和でお金もある。こんなに豊かでいい国でさえ自然の良さがわからないのかと思いました。こんなに平和な国がダメならば、他の国もダメですよ。そんな時に、祖国、ウェールズから手紙が来たんです。“アフア・アルゴートという場所に森を作った。日本の木をそこに植えたのだけれど、何がいたるうか？”と。

僕は信じられませんでした。産業革命で森林をどんどん破壊してしまったウェールズは、私が子供の頃には月の表面のように荒れ果てた土地でした。1920年頃までは、国の20%以上あった森林が、第一次、第二次世界大戦の間でわずか6%しかなくなってし

まったんです。その国が森を作っていると聞いてウェールズに行ってきました。ウェールズでは豊かな緑を取り戻すために本当に森を作っていました。現在森は12%までに増えたそうです。川の再生なども行っていますから、30年後には森は倍に増えるでしょう。僕はそれを見て、日本に森を作ろうと思ったんです。日本はまだ助かる、僕はそう信じたんです。“アフアの森”というのは、アフアン・アルゴートからとって付けました。



例えばここでこれまでのように、エチオピアなど、日本以外の深刻な地域に行って活動を行おうとは思わなかったのですか？

それはしません。僕はこれまで世界中を見てきて、戦って、疲れて逃げてきました。そして辿り着いた日本ではもう逃げたくなかったんです。それに僕はまず、自分の周りの環境を保護すべきだと思ったんです。人の国に口を出すのではなく、まず自分の周りの環境を守れと僕はいつも言うんです。

まずは自分の住んでいる黒姫を救おうということですね。

はい。エチオピアのためにどうかしようと言われても、僕はやりませんよ。“think globally act locally”という言葉があります。1人1人が意識して自然を残していけないとどうにもならない問題なんです。

生物の多様性は未来の可能性 「一緒に未来を考えて欲しい」

森の再生活動というのは、具体的にどのようなことをされているんですか？

まず、我々の森は原生林ではなく2次林です。昭和30年頃に1本も残らず伐採され、その後、杉やカラ松を植えて手入れもされずやぶになっているような所でした。ちなみに日本に原生林はどれくらいあると思いますか？ 日本の森全体の約2%しかないと言われています。

たった2%！

それぐらい減ってしまったんですよ。それ以外の森は全て人の手が加わっているんです。そういう荒地に立派な木を育てるんです。木には2種類あって、切り株から新しい芽を出すものとそうでないものがある。栗、ナラ、やなぎなど、切り株から芽を出すものは切り株が残っていれば芽を出すんです。ところが一本の切り株から何本もの芽が出てしまうんです。そのままでは木にストレスがかかってしまい、100年おいておくとどれかは負けてしまう、生き残っても貧弱で大木ができないんです。僕らはどの芽を残すか考えながら、他の芽を間引くんです。ほおっておくと300年かかるものも、100年くらいで大木になることができるんです。

他にも、日本の森は手入れをしないとかならず笹が生えてきます。その笹を刈ってやることで何十年もその下に眠っていた木の芽を発芽させてやったり、木を絞め殺してしまうつるや雪の重みで折れてしまった木を取り除いたりもします。もちろん、笹やつるを全て刈るわけではありません。need everything! 森には多様性が必要です。多くの種類があれば、それぞれの植物につく虫が増えます。その虫が新たな植物を運んでくる。森に多様性があれば様々な可能性が広がって、それが未来につながっていく。だから笹が必要な場所には笹を、つるを残さなければいけない場所にはつるを残します。

どちらを残すか、その判断をつけていくことが難しさなのでしょうね。

一緒に森を整備している松木さんと一緒にけんかしながらやっていますよ（笑）。でもね、困るのはそれを見た知ったかぶりの人たちが、木を伐っている、森林破壊だと言ってくるんですよ。ちゃんと林業を勉強していない人たちが多すぎるんです。林業とは言わなくても、今の人達は自然を知らなさ過ぎるんです。自然の多い田舎に住んでいる人だって知らないんですからびっくりしてしまいます。僕が最初に日本に来た頃は、日本人はどんな西洋人たちよりも自然をよく知っていたと記憶しています。子供に、あれは何の鳥？ 何の花？ と訪ねると、だいたい教えてくれました。今はまったく知らないですよ。

自然を教えられる機会も、自然に触れる機会もなくなってきているということなんでしょうか？

それ以前に興味がなくなってきているんでしょう。テレビを見て育っているから脳が遠くのものを見ようとしなくなっている。目がよくてもダメなんです。子供たちと森を歩いて100m先に鳥がいるよと教えても、どこどこ？ って言うばかりです。ナラの木の所で動いているでしょって言うても通じない。

まずはもっと多くの人に自然に興味を持ってほしいということですね。

日本には多くの森林があります。長野県は県土の約78%が森林です。それなのに長野県民で森を歩く人は少ないんです。せいぜい山菜を採りに来る人ぐらいで、普通の人が休みの日に森林浴に行こうとはしないんです。子供が森で遊ぶということもない。長野県だけじゃない、東京にいたって近くの公園や神社に木を見に行く人が少なすぎるんです。アフアの森にはいろいろの人が来ます。ですがここまで来なくても、日頃から身近にある自然を大事にしてほしい。そして、一緒に未来を考えて欲しいんです。



ニコルさんと一緒に再生活動を行っている松木さん。ニコルさんの自宅にて撮影。

野草や動物など森での出来事はカメラマンに

本日はニコルさんが撮影された写真を数枚お持ちいただきました。



船内の様子を撮影。この時は『裸のダルシン』（2002年）を執筆中だったそうだ。



船室から見たアラスカの景色。

はい、これはアラスカですね。客船の“飛鳥”に乗って世界を旅しながら本を書いていたんです。僕は執筆するときには船に乗ったり、旅館に泊まったりして書くんですよ。船はどこを回ってもいい、そうやって集中して書くんです。これらは執筆の合間にちよこっと撮った写真です。

こちらの写真はなにを写されたものですか？



墓石の裏にはマルタ島で命を落とした69人の名前が刻まれている。



旧日本海軍戦没者が眠る墓。ここに初めて訪れたという池田さん。

地中海のマルタ島にある日本海軍のお墓なんです。僕には森というイメージがあると思いますが、小説を書く上での題材はいつも海なんです。海は僕のライフワーク、大好きですよ。ちょうど日本海軍の取材をしていたとき、第一次世界大戦時に地中海に派遣された士官の書いた手記を発見したんです。それがとても素晴らしくて、何とか世に出そうと僕が再編集をして、『日本海軍地中海遠征記』という本として出版したんです。マルタ島には今でもその戦いで亡くなった69人の日本海軍の墓が建っているんです。80年経ってマルタの人々がお墓を手入れしていると聞いて、僕は本当に感動しました。それで、この本の編者としての印税をお墓に寄付したんです。

写っている方はどなたですか？

池田武邦さんという有名な建築家です。池田さんのお父さんは、マルタに来ていた日本海軍の駆逐艦の艦長でした。彼はマルタ島にまだ行ったことがないというから、一緒に行こうと誘ったんです。そしてお墓の前で撮りました。

こうして旅に出かけるときに写真を撮られることは多いのですか？

実はね、最近は撮る機会が減ってきてしまったんです。若い頃、エチオピアにいた頃かな、写真に凝っていてよく撮っていましたが、今はこうして旅に出る時に撮る感じですね。僕には普段からカメラマンがついていて、森の写真は彼によく撮ってもらっているんです。森の動物や野草……季節ごとにいろいろな野草が出来ますから、結構頻繁に撮ってもらいます。あとは雪下ろしの時の写真なども撮ってもらいました。僕自身も撮ってもらいますよ。

アフタンの森のホームページにもたくさんの写真が掲載されていますね。

ホームページだけでなく、僕も著書にも彼の撮った写真を掲載しています。森での出来事や活動の報告、そして森の美しい自然を知ってもらうためにも必要なことですから。

日本を緑豊かな美しい国に「平和な国をみんな望んでいるはず」

今の季節、森の仕事は忙しいのですか？

雪が溶け始めてからはとても忙しいです。去年初雪が早く来たからまだ葉っぱのついた枝が重みを増して、たくさん枝が折れたんです。それをちゃんと伐らないと病気が入ってしまうので……。

ではもう、すぐにでも黒姫に帰りたい。

そうです。また松木さんとケンカしながらね（笑）。僕と松木さんは、この森に30年はかけようと言っているんです。松木さんはこの森に来て14年、だからあと16年はこの森を見続けようと思っています。その時僕は生きていたら79歳です。

その頃には理想の森ができていのでしょうか？

いいえ、僕たちの望んでいる森を見ることはできないでしょう。でもその頃にはある程度、この先何年で森がどうなっていくのかということが読めるようにはなっていると思います。森の仕事というのはそれぐらいスパンの長いものなんです。森の未来を見ることはできませんが、今可能性を与えることで必ず望むような森ができると信じています。僕は未来を信じています。

執筆活動を通して、そして森の再生活動を通して、ニコルさんが一番伝えたいことはなんですか？



美しい生き物たちと自然を破壊して、この地球に人間だけ生き残ってどうなるのよ、と。水も、空気も、未来を生きる子供もダメにしていったなんになるの？人は緑がないとどう猛になり、緑のある美しい国にいれば平和を求めるはずなんです。イラク戦争を起こす金があるのなら、半分砂漠になっているあの土地にもっと緑を増やせばよかったんです。その点日本にはまだ豊かな緑がある。だから日本人にはまず、日本をちゃんと美しい国にすることが大事なんだと言いたいです。森、川、干潟、全部守れば海もきれいになる。緑をふやせば街の空気もきれいになって病気が減ります。平和、美しい国、みんな望んでいるはずですよ。

1人1人の意識が、美しい日本をつくる第一歩になっていくのですね。私も、家の近くにある緑から見直してみようと思います。本日はありがとうございました。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.